

ラテンアメリカ の小さな国

ジョーン・デイティオン

千本健一郎訳

Salvador



著者について

ジョン・ディディオン

一九三四年カリフォルニア生まれ。カリフォルニア大学バークレー校で英文学を専攻。『ヴォーグ』誌の編集者を経て、『タイム』誌の記者だったジョン・グレゴリー・ダン（現在、作家）と結婚。処女作『河は流れる』以後、『マライア』（邦訳角川文庫）、『日々の祈りの書』（邦訳サンリオ）、『ベツレヘムに身を屈めて』などを発表。『現代アメリカ文学で最もすぐれた文体をもつ作家』と評される。

訳者について

千本健一郎（せんぼん・けんいちろう）

一九三五年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。『朝日ジャーナル』副編集長を経て現在、朝日新聞社出版局編集委員。

晶文社セレクション

ラテンアメリカの小さな国ちい くに

一九八四年二月一〇日発行

著者 ジョン・ディディオン

訳者 千本健一郎

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

あづま堂印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することとは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（横印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ラテンアメリカの小さな国

ジョーン・テイデオ

千本健一郎訳

この本を

ロバート・シルバースと

クリストファー・ディッキーに

捧げる

Joan Didion

SALVADOR

Original Copyright © 1983

by Joan Didion

Japanese Copyright © 1984

by Shobun-sha Publisher, Tokyo

Japanese translation rights arranged with

Joan Didion, % Wallace & Sheil Agency Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ブックデザイン 平野甲賀

全体の背景については、とくにトーマス・P・アンダーソンの『大虐殺——一九三二年のエルサルバドル共産主義者の反乱』（ネブラスカ大学出版局、リンカーン、一九七二年）と『奪われた者の戦争——一九六九年ホンジュラスとエルサルバドル』（同一九八一年）の二冊と、デビッド・ブラウニングの『エルサルバドル——風景と社会』（クラレンドン・プレス、オックスフォード、一九七二年）に、さらにサンサルバドルのアメリカ大使館筋の人びとに負うところが大きい。また夫のジョン・グレゴリー・ダンには、ほぼ全面的に協力をあおいだ。彼は私とともにエルサルバドルに滞在し、そこでの出来事をめぐるメモや記憶や解釈などを通じて、この国についての私自身の物の見方をひろげ、啓発してくれた。

「いわばヨーロッパ全体が集つてクルツを作り上げたといつてよい。そしてそのち知つたことだが、彼は国際蚕習防止協会から、将来の参考のために、報告書を書いてほしいと頼まれていたらしいのだ。まことに適当な人を得たというべきだが、事実彼はそれを書いていた。僕は実際見もし、読みもした。実に雄弁、というよりはまるで一語一語が躍動しているような雄弁さだった……『吾々はただ意志の働きだけで、ほとんど無限の道徳的能力を行使することが可能である』云々といった調子で、あとは天馬空を行くの概に、僕は完全に魅了されてしまった。結論については、あまりよく憶えていないが、とにかく雄大なものだった。それはなにか莊嚴な『仁愛』の支配する、異郷的『無限さ』とでもいったものを思わせた。僕でさえもがなにか情熱の疼きを覚えた。ま

ことに雄弁——つまり言葉——しかも燃えるような崇高な言葉のもつ無際限の力を示していた。まるで魔法にも似た章句の奔流を中断するような、かりにも実的な言及などはなになに一つない。あつたとすれば、ただ最後の頁に脚註風の一つ、震える手で、明らかにずっと後になつて書き込んだものに相違ないが、いわば方法の提示とでもいったものがあるだけだつた。だがそれとてもきわめて簡単なもので、ありとあらゆる愛他の感情に切々と訴えてきた最後に、まるでそれは稲妻が一閃、静かな大空を劈ざくにも似て、恐るべき閃光を投げかけていた。曰く、「よろしく彼等野獸を根絶せよ！」と。

(ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』、中野好夫訳による)

完成してから三年目のエルサルバドル国際空港は、ぴかぴかに新しく超モダン風で、あくまで美しく、みごとなほど孤立しており、モリナ政権（一九七二―七七年の「国土改造」計画が勢いを失ってからは、首都サンサルバドルに入るより、モリナ・ロメロ体制（七七―七九年）がつくりあげた代表的な蜃気楼——新しく開発された海辺の行楽地であるファット、パシフィック・パラダイスといったホテル群、それにテニス、ゴルフに、水上スキー何でもござれ、おまけに高層アパートまでが立ち並ぶへ太陽海岸^{コスタ・デル・ソル}——にたどり着くほうが、ずっと便利のように思える。（ちなみに、サンサルバドルまでは四〇マイルあり、つい最近まで車で五、六時間かかった。）この蜃気楼を築いたのは、自然死亡率では消化器系の感染症が上位を占めるといった他の発展途上国にもよくある、観光重視政策である。観光客の足が遠のくにつれてホテル群はうち捨てられ、がらんとした太平洋海

岸はゴースト・ビーチと化し、こうして観光施設をあてこんでつくられたこの空港に降りたつと、たちまちある状態に投げこまれてしまう。つまり、自分の足もとも定かでない、空間のひろがり泥沼のようにとりとめなく、何一つ輪郭がはつきりつかめないもので、いつ見聞きしたことが逆転するともかぎらない、といった感覚に襲われるのである。

唯一、哲学があるとすれば、目の前の現実を黙って受け入れることしかない。入国手続きのやりとりの背後には自動兵器がびっしり並んでいる。だが、だれの命令で（陸軍か、国家警備隊か、国家警察か、税関公安官か、財務警察か、それとも絶えずふえている影の混成軍の一つか）、その兵器が火をふくのかも、はつきりしない。だれもが視線をそらそうとしている。書類は逆さまにされたまま丹念に調べられる。やつと空港から解放され、緑の丘陵を縫って走る新しいハイウエーに出ると、熱帯の雨期特有の雲におおわれて丘は青白くみえ、まず目につくのは、やせこけた牛や雑種犬であり、さまざまな装甲車——バンやトラックや、鋼鉄で武装をかため厚さ一インチの防弾ガラスまでついたチェロキー・チーフ装甲車である。この種の車はこの国の日常生活に密着していて、ふつう行方不明や死と結びついている。一九八二年三月、チャラテナンゴ省で殺された

四人のオランダ人テレビチームの殺害現場にあったのは、このチェロキー・チーフだった。一九八〇年一二月のある夜、殺された四人のアメリカ人カトリック修道女たちが運転していたバンの近くで見つかったのは、赤塗りのトヨタ製〇・七五^ト積み小型トラックだった。また、一九八二年の春から夏にかけて、サンサルバドルのアマテペック地区で三回にわたっておこなわれた大量拘禁のときにも、それぞれ一台は黄色、一台は青、もう一台は緑色のトヨタ製バンタイプ商用車が、ナンバー・プレートを取られて乗り捨てられていたという。「拘禁」もこの国の日常生活に密着しており、「行方不明」につながる場合が多い。装甲車の形や色、武器の構造や口径、また特殊な場合に用いられる、死体をばらばらにしたり首を切ったりする特殊な方法——エルサルバドルを訪れたものは、たちまち過去や未来への関心を失って、一種もうろうとした慢性的記憶喪失状態におちいり、こうした現象の細部に神経をとがらすようになる。

死と隣り合った恐怖は、この国をおおう既成事実である。日常生活のいたるところに、

その種の恐怖がついてまわる。黒と白に塗り分けた警察のパトカーが二台一組になって町なかを巡回しているが、いずれも、あけ放した窓からライフルの銃身を突き出している。道にはバリケードが手当たりしだい築かれ、兵士がトラックからおりて所定の位置につき、たえず銃の引き金に指をかけ、安全装置をカチャカチャ鳴らしている。人の命をねらうのも、まるで退屈しのぎのようだ。毎朝、『エル・ディアリオ・デ・オイ』や『ラ・プレンサ・グラフィカ』といった新聞が、ひかえめな記事をのせる。たとえば、「母親と二人の息子が、八人の正体不明デスコノシデスの男にベッドでめった切りにされて殺された」といった記事だ。また同じ日の朝刊に、身元不明の若い男の絞殺死体、道ばたで発見さる、とある。さらに同じ日の別の記事には——身元不明の三人の若者の死体、路上で発見さる。三人とも顔面は銃剣で一部損傷、一人は顔に十字架を刻まれて、ともある。

アメリカ大使館がまとめる死体数は、こうした新聞報道をもとにしていることが多い。大使館からワシントンへの報告は週に一回、打電されるが、大使館員はこれを「残酷電グロテスクグラム」と呼んでいる。この大使館報告は、一種のこじつけ的表現もまじっているが、政府軍が人殺しの大半をおこなっているというエルサルバドルの常識までは粉飾していない。

たとえば、一九八二年一月一五日付のワシントン宛メモで、大使館は、一九八〇年九月一六日から翌八一年九月一五日までの一年間に「報道された」六九〇九件にのぼる政治的殺人事件の「慎重な」内訳を報告した。このメモでは、六九〇九件のうち、九二二件が「治安部隊による犯行と推定」され、九五二件が「左翼テロリストの犯行と推定」され、一三六件が「右翼テロリストの犯行と推定」され、四八八九件が「正体不明の暗殺者によるもの」とされた。正体不明の暗殺者とは、今なお発行を続けているサンサルバドルの新聞が好んで使う、例の「正体不明の男たち」である。（この数字をたしても実際には六八九九件にしかならず、一〇件は公式記録から落ちている。）大使館メモは、こう続けている。

「当地での曖昧さは、多くの場合、責任の所在がはっきりしないという事実と見あっている。しかし、エルサルバドルでは、大多数の迷宮入り殺人は、公的であれ私的であれ、治安部隊が手を下しているとみるのが常識であることを強調しておく。当大使館は、当地での殺害事件の主犯は治安部隊であるとする、さまざまなグルー